



種をまく人

浅はかな私の知る限りの知識で、「種をまく人」という言葉で思い出すのは、ボストン美術館や山梨県立美術館に所蔵されているミレーの「種をまく人」と、ゴッホの名画「種をまく人」、マタイ福音書「種をまく人」、それにポール・フライシュマンの小説「種をまく人」くらいですが、ミレーとゴッホの絵画から受ける強烈な第一印象に比べ、マタイ福音書やポール・フライシュマンの小説は文字の世界だけに読み解く知識がないと、その深い意味は理解できないのです。しかし最近になってマタイ福音書とポール・フライシュマンの小説を「地域づくり」という視点で改めて読み返してみると、そこには多くの教えが隠されているような感じがするのです。

マタイ福音書には、「ある種は道端に落ちて鳥が食べ、土のない石地に落ちた種は直ぐに芽を出したものの日に焼けて



国道378号線の緑地帯を手入れする「ふたみ花の会」のメンバー

ず、またせつかく出た芽を途中で枯らしてしまいました。しかし今にして思えば私は地域づくりという畑にどんな種をいつ蒔き、どんな花を咲かせてどんな実を結びせよとしていたのか、疑問に思わざるを得ないのです。私が「人づくり」と称してやっていた活動は、むしろ育たないのは当たり前前の荒れ地に、ただ義務感で種を蒔いているに過ぎなかったのですから、芽が出ず育たないのは当然だったと深く反省するのです。

ポール・フライシュマンの「種をまく人」には、アメリカオハイオ州クリーヴランドの貧民街にある空き地に、一人のベトナム人少女がライ豆の種を蒔き、それがきっかけで付近の住民たちは、様々な人種の様々な年齢の人たちが色々な種類の種を蒔き、育ててみずみずしい菜園ができた様子が生き生きと描かれています。

枯れ、いばらの中に落ちた種は塞がれて芽が出ませんでした。しかしもう一つの種は良い地に落ちました。するとあるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結びました」と書いています。

私はこれまで青年団活動や公民館活動、それにまちづくりの現場で人づくりという仕事に深くかかわって来ました。その度にいい人を育てようと必死になつて種を蒔きましたが、あせっても芽は出

私はふと「自分の住む町が汚い」と嘆きながら、二十年前に町を美しくしようと女性や青年が花を植えた、まちづくり草創の頃を思い出しました。女性の蒔いた菜の花の種も、青年が植えた桜の苗も花を愛し町を愛する人の心の優しさに育まれ、見事な花を咲かせているのです。双海町という町の以前の姿（ピフォ

今年も始まった「おもしろ1日大作戦」の
芋植え体験in人間牧場



し)を知っている人にとつて、最近の伊予市双海町の年中花に溢れた姿(アフター)は、美しさの点では比較にならないほどの変貌ぶりなのです。

その変化の源は何だったのか考えれば、やはり人づくりに行きつくのです。旧双海町では自治公民館活動が活発に行われていました。その土壌もあって人を育てる気風が旺盛で、「人づくり十年計画」などによる人育て事業を継続してきました。国内や海外の先進地に派遣された町民は、旅先で異文化ギャップを感じ

ながら様々なまちづくりの知恵を学んでアクションを起し、夕日や花やホタルをテーマにして理想郷を作るべく奔走したのです。その想いは合併して多くの市町村が地盤沈下に悩んでいる中であっても、それなりに自立し輝きを放つてサステイナブル社会を形成しているのですから立派というほかありません。
マタイ福音書は人の育つ土壌と種の大切さを説いています。一方ポール・フライシユマンの小説は種を蒔くキーマンと仲間の必要性を説いています。しかし人も植物と同じで土壌と種、それに蒔く人



地域通貨について学ぶ奥東自治公民館

と育てる人だけで育つものではないのです。水や太陽という自然の恵みも病害虫への備えも必要なのです。

その基本はやはり5W2Hではないかと思っています。Who(誰が)、What(何を)、When(いつ)、Where(どこ)、Why(なぜ)、How(どうやって)、How Much(いくらで)と順を追ってしっかりとした計画を立てれば種も土壌も、種を蒔く人も、仲間も育む自然も見えてくるのです。

誰が「種をまく人」になるのか、それは私であり、あなたでもあるのです。要は自分のまいた種が三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶような種を蒔くことなのです。

無造作に蒔いただけでは
生えもせず 思いなければ 人は育たず
中国の 古書大学の 一節を
幼小なれど 金次郎読む
振りかえりや 異文化ギャップ
学ぶ旅 出たからこそ 価値観変化
権兵衛蒔きや カラスはぼくくる
例えにて 種と仕掛けが なくば育たず
(若松進一笑売啖呵より)